別　紙　３

平成２４年度北海道大学情報基盤センター共同研究成果報告書

１．研究領域番号　　Ａ５　デジタルコンテンツ

２．研 究 課 題 名　　ICT 時代の言語教育環境と教材開発

３．研 究 期 間　　平成２４年４月２３日　～　平成２５年３月３１日

４．研 究 代 表 者

氏　　名	所属機関・部局名	職　　名	備　　考
長野　督	北海道大学 大学院メディアコミュニケーション研究院	教授	

５．研 究 分 担 者

氏　　名	所属機関・部局名	職　　名	備　　考
田邉　鉄	北海道大学 情報基盤センター	准教授	
平林　義治	北海道大学 情報基盤センター	准教授	
西山　教行	京都大学 大学院人間・環境学研究科	教授	

６．共同研究の成果

本研究は、外国語学習の動機付けを維持向上するための ICT 活用について、多角的・多元的に検討することを目的とする。継続課題として、これまでに、デジタル化教材・e-Learning・オンラインポートフォリオ・学習コミュニティと協働などの課題を扱ってきた。その中で、「学習者が自らの位置を見極め、学習内容を自己決定する自律的な学習」と「デジタル化による、学習コミュニティの活性化」が、学習動機を高める要因として期待されることがわかった。一方で、「何のために外国語を学ぶのか」という動機付けに関する根本的な問いに対して、初習外国語だからこそ経験できる他の言語・文化に対する「気づき」が重要な役割を果たしていることが分かった。

研究を進めるにあたって、まず英語一つだけではない複言語・複文化教育環境がアイデンティティに及ぼす影響について公開研究会「CEFR：複言語・複文化と英語教育・フランス語教育」を行い、必要な知見や理論、過去の実践等を整理した。まず、クロード・ジェルマン氏（カナダ，ケベック大学モントリオール校）から、「カナダのイマージョン教育」と題して、40 年間の経験と知見、結果が報告された。現在、小学校での英語教育導入が問題になっており、世界中の様々な状況が研究されているが、カナダのイマージョン教育は中でも成功例として頻繁に引用される。簡単に言えば、カナダの英語圏で小学校時代を完全にフランス語で教育を行うやりかたで、これにより、比較的無理なくバイリンガルの生徒が育ち職業選択にも有利に働いている。今回の発表では、しかし、あまり文献に書かれていない問題点が率直に述べられた点が収穫であったと。それは、バイリンガルといいながらも生徒たちのフランス語には相当な文法的間違いが残ってしまっていること、また、この教育を施すためには教師の養成と確保に非常に費用がかかるということだ。まさにこのために、成果を上げているイマージョン教育は全国には広がらないのである。ここの点において、先の教育再生本部の提言のように、教員養成や中高生の学力向上といった決め手を持たず、安易に英語偏重の「教育改革」を進めようとする日本政府の姿勢は再考を要するのではないか。つぎに J.-F.グラズィアニ氏（京都大学）からは、複言語主義を唱えるヨーロッパにおいて、ヨーロッパ以外の言語である英語はどのように扱われているか。ヨーロッパのアイデンティティを守るための複言語主義ではあるが、やはり母語とあと 2 つの外国語、といったときには一つは英語になる現状が報告された。また、大木充氏（元京都大学）はそれを日本に置き換えて、大学までの英語教育と大学での外国語教育について、動機づけの観点から報告があった。最後に姫田麻利子氏（大東文化大学）が、母語

の他に高校まで英語、大学でさらに初習外国語を学んでいる学生たちに、「その外国語は体のどこの部分にあるか」という図を書かせる方法で、その外国語が自己のアイデンティティとどのように関わっているかを分析して見せた。この研究は、姫田氏が一貫して行っているポートフォリオの研究の一環であるが、各言語の持つイメージと共に学習者にとって言語とは何かを示唆する興味深い研究であった。

この研究会では、札幌市内の高校の英語の先生方が何人も参加され、活発な議論が繰り広げられたが、その内容からは、現代の日本において外国語（高校までは英語）を教えるということはどういうことなのか、何をどうやって教えたらいいのかという深い苦悩が垣間見えた。

共同研究による成果：

論文

・« Éveil à la pluralité et hégémonie linguistique. D'un enseignement précoce de l'anglais à une éducation internationale au Japon », in Dynamique des langues, plurilinguisme et francophonie en Asie de l'Est. La Corée.Sous la direction de Pierre Martinez, pp. 195-204 NISHIYAMA Noriyuki et OYAMA Mayo Éditions Riveneuve, Collection Actes Académiques, Paris. 2013. 3
（『複数性への目覚めと言語の覇権。日本における英語の早期教育から国際的な教育へ』）

・« Motiver par l'éducation au plurilinguisme: développement d'une didactique appropriée à l'apprentissage du français au Japon », Mitsuru OHKI, *Didactique plurilingue et pluriculturelle：l'acteur en contexte mondialisé* (Editions des archives contemporaines), pp. 150-160, 2012.
（『複言語主義の教育によってやる気を出させる』

口頭発表

・「教育･学習環境のフランス語学習者の動機づけにあたえる影響」，大木充，堀晋也，長野督，西山教行，姫田麻利子，日本フランス語教育学会秋季大会，2012 年 11 月 11 日.

・« Les Nouvelles Technologies de l'Information et de la Communication (NTIC) et l'enseignement des langues en France：vers un changement de paradigme ? » Communication au congrès de printemps de la Société Japonaise de Didactique du Français (juin 2012).
（『フランスにおけるITCと言語教育』